

# ポローニア

paulownia

## 法人化 2年目の躍動



## ■教育長のご挨拶

多様な“子どもたち”こそ附属学校の財産だ  
—一大連携のために— ●谷川彰英……………1

## ■研究発表会

平成16年度筑波大学附属学校教育局  
研究発表会に参加して ●磯田文雄……………2  
大学と附属学校の有機的な連携を目指して ●鳥山由子……………2

## ■研修会

平成16年度春期研修会について ●江口勇治……………3  
常に知的で刺激的な附属学校を目指して—春期研修会— ●鈴木 亨……………3

## ■センター研修会

特別支援教育研究センター春期セミナー ●前川久男……………3  
特別支援教育研究センター主催セミナー  
「特別支援教育の最前線(2)」に参加して ●中島浩美……………3

## ■新任教員紹介

ごあいさつ ●皆川春雄 ●生田 茂 ●菅野和恵 ●下山晃司 ●宮崎秀生……………4

## ■新年度業務一覧

平成17年度附属学校教育局指導教員の  
役割および業務内容一覧……………5

## ■名物先生紹介

高村先生のこと ●梅原無石……………5

## ■TOPICS

筑波大学東京キャンパス大塚地区の紹介……………6

### ●広報紙名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の校章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が吉祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な装束の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロワナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロワナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事背景やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

## 平成17年度附属学校教育局・附属学校研究発表会、研究大会等予定

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会、及び各校の研究テーマを深めるための公開研究会を下記の日程で開催する予定です。ぜひご参加ください。 ※各附属学校が会場となります。(附属学校教育局を除く)

学校名	テーマ	予 定
附属学校教育局	平成17年度夏期研修会 平成17年度筑波大学附属学校教育局研究発表会	平成17年 8月19日(金) 平成18年 2月25日(土)
附属小学校	学習公開・研究発表会 —「子ども力」の基礎研究— 学習公開・初等教育研修会	平成17年 6月 9日(木)、10日(金) 平成18年 2月16日(木)、17日(金)
附属中学校	研究協議会	平成17年11月12日(土)
附属高等学校	高等学校教育研究大会	平成17年12月 3日(土)
附属駒場中・高等学校	第32回教育研究会	平成17年11月25日(金)、26日(土)
附属坂戸高等学校	第9回総合学科研究大会 第9回総合学科研究成果発表会	平成18年 2月16日(木) 平成18年 2月17日(金)
附属盲学校	第3回視覚障害教育研究協議会	平成18年 2月18日(土)
附属聾学校	関東地区聾教育研究会聾教育実践研究会 聴覚障害教育担当教員講習会	平成17年 6月23日(木)、24日(金) 平成17年11月15日(火)～18日(金)
附属大塚養護学校	第41回知的障害児教育研究協議会	平成18年 2月 9日(木)、10日(金)
附属桐が丘養護学校	第34回肢体不自由教育実践研究協議会	平成18年 2月 9日(木)、10日(金)
附属久里浜養護学校	自閉症教育実践研究協議会	平成18年 2月16日(木)、17日(金)

多様な子どもたちこそ附属学校の財産だ  
—— 高大連携のために ——

附属学校教育局長  
谷川 彰 英



法人化2年目を迎えた。1年目は新しい制度・組織をつくることに追われ、苦しいことも多かった。1年を経てようやく城郭の輪郭ができあがったというのが実感である。2年目はいよいよ、内堀と本丸をつくるというのが課題となる。その要になるのが、大学との連携である。

附属学校である以上、本体の大学とどのような連携・交流を行うかは最重要な課題である。ところが、かつては、附属学校は附属学校であって大学との連携など余り問題ではないという意識が支配的な時代もあった。しかし、今はまったく状況が違ってきている。大学本体から存在を認知されなければ、附属学校の存続そのものも危うくなる。現代の制度改革は急ピッチに行われる。次の法人化サイクルの中期目標には附属学校をどう改革するかを書かなければならないかもしれない。

そこで、考え出したのが、「高大連携・人材育成7年プロジェクト」である。附属学校の多様な人材を筑波大学に送り、人材育成を7年かけて行おうという試みである。高校段階から大学との連携で教育を行い、その成果のもとに大学教育を充実させようとする。そのために、多様な人材を筑波大学本体に進学させ、継続して教育を行うようにしたい。そのことによって、大学も附属学校も活性化する。

高大連携の接続教育は東京工業大学やお茶の水女子大学、愛知教育大学など多数の国立大学が取り組みを始めている。筑波大学では大学と附属学校との距離が離れているというハンディを負っていたが、つくばエクスプレスの開通など条件が変わりつつある。

もともと、学校というところはどう考えても金銭的な利益を得るところではない。むしろ逆に金を使うところである。したがって、競争原理をもとにする法人化とは基本的に合わない機関であると言えないこともない。

しかし、だから大学にとって附属学校はお荷物かと言えば、そんなことはないと言断できる。それは、附属学校は多様な“子どもたち”を擁しているからだ。附属の児童生徒の中から必ずしも多くの卒業生が筑波大学に進学せず(進学できず)、附属実験学校としての役割を充分果たしてあげることができなかったことに問題がある。そこに風穴を開けたい。そのことによって、筑波大学と附属学校は活性化し、新鮮になる。

## 平成16年度筑波大学附属学校教育局 研究発表会に参加して

筑波大学理事・副学長 磯田文雄

筑波キャンパスにおりますと、附属学校のことがよく見えません。また、附属学校教育局がどのような機能を果たしているかについて、まだまだ、大学の教職員の方々の理解は少ないといえます。そのような状況の中、今回、私も研究集会に参加させていただき、附属教育局及び附属学校についての理解が大いに進みました。もっともっと多くの参加者を、筑波キャンパスからも、そして、附属学校からも、本年度は期待したいものです。そのためにも、法人化時代の附属学校の在り方を考えてみる必要があります。

研究集会では、最終年度を迎えた3プロジェクト研究についてのすばらしい発表がありました。その一例として、飯田範子先生らによる附属学校におけるカリキュラム開発の実際についての研究を取り上げてみましょう。今日、教育課程経営ではなくカリキュラム・マネジメントが求められており、特に、総合的な学習の時間にカリキュラム・マネジメントが有効に機能すると言われていますが、附属学校を横断的に調査された本プロジェクト研究は、各附属学校が相互に連携協力しながら、各校のカリキュラム・マネジメントを改善していくための貴重な出発点となると考えます。法人化後は、このような各附属の力を総合する取組みが、ますます必要となるでしょう。次に、鳥山由子先生の司会のもとに行われた筑波大学と附属学校の連携についてのシンポジウムを挙げることができます。各附属の個性と長所を生かした連携の取組み状況と今後の抱負が語られ、今後の連携のより一層の発展に強い期待を持つことができました。

そして、改めて法人化の意味を考えさせられました。法人化というのは、文部科学大臣と国立大学法人筑波大学が、中期目標、中期計画という契約を結んだわけで、各附属学校を含む国立大学法人筑波大学は、中期目標を中期計画に沿って誠実に達成する義務があります。中期目標の附属学校に関する部分は、「児童・生徒等の心身の発達に応じた教育の実践を通じ、大学の教育研究に積極的に協力し、大学との連携をより強化。社会の要請や環境の変化に応じた附属学校の在り方を検討し、初等中等教育改革を先導的に推進。」となっています。各附属学校には、筑波大学と附属学校の連携強化により、本研究集会のテーマにもありましたように、「教育改革をリード」してもらいたいものです。

## 大学と附属学校の有機的な連携を目指して

附属学校教育局次長 鳥山由子

2月26日、岩崎洋一学長、磯田文雄副学長のご臨席のもと、平成16年度附属学校教育局研究発表会が開かれた。盛会であった当日の主な内容は、プロジェクト研究グループの発表、大学と附属の連携に関わるシンポジウム、そして、現在の社会的な課題であるキャリア発達支援について、第一人者である渡辺三枝子心理学系教授の講演であった。

連携に関するシンポジウムでは、附属11校が4つのグループに分けて実態を報告した。第一のグループは大塚地区にある附属小・中・高、3校である。従来より「三校研」として教科ごとに研究会を続けていたものに大学が加わって「四校研」になり、教科教育における小・中・高の一貫制を研究している。第二のグループは附属駒場中・高で、スーパー・サイエンス・ハイスクールに全校で取組み、科学教育の実験校として大学と連携している。第三のグループは附属坂戸高校で、総合学科のモデル校をめざして大学と連携しており、特に生物資源学類とは歴史的にもつながりを持っている。第四のグループは障害児教育5校で、心身障害学系と教育・研究において密接な連携システムを築き、16年度発足した特別支援教育研究センターには、各附属学校から派遣された教諭が大学の教員とともにスタッフとして勤務している。

各学校の報告を受けて3人の大学教員からコメントをいただいた。まず、田中統治教育学系教授からは、法人化の時代の附属の在り方について問題提起があった。また、加藤衛拓農林学系助教授からは、大学生を附属で学ばせる教育的な効果について実践報告があった。特別支援教育研究センターの前川久男心身障害学系教授からは、国の方針として進められている特別支援教育について説明があり、普通附属も関心を持ってほしいとの話があった。

今年度の研究発表会が、大学と附属学校のさらなる有機的な連携を追求する中で、特色ある取組みを発表できる場となることを願っている。



## 平成16年度春期研修会について

附属学校教育局 江口勇治

標記研修会は、次の日程および内容で開催されました。

- 日時:3月25日(金)、13:00~16:30
- 内容:1. 講演「教育の脳科学をめざして」酒井邦嘉氏(東京大学大学院総合文化研究科・助教授)
- 2. 話題提供「学校における法教育の動きと今後について—法務省「法教育研究会」報告書を中心に—」江口勇治(附属学校教育局・教授)

当企画は夏期研修に次いで二度目で、年度末の多忙な時期にもかかわらず、附属学校の多くの教員が参加され、担当者の一人としてほっとしています。

酒井先生は附属高等学校の卒業生で、新進気鋭のきわめて実証を重んじるすばらしい方でした。英語や手話言語と脳活動の関係から、その獲得のメカニズムをfMRIを用いて解明する先端的なもので、とても刺激的でした。観念的理想は、どこかで誰かにより証明される必要を素人ながら感じました。今一つは個人的な法教育への思いを語らせて頂きました。私の師は憲法教育の大切さを力説された方ですが、その思いを時代

や人々の中で試みる法教育の最近年の動きを紹介しました。附属の子どもたちが感受性豊かな時期に、時代と人々の心を教材に乗せて伝えることが教育の一つの志だと思います。実施では指導一課の方々に協力頂いたことを申し添えます。

筑波大学附属学校教育局春期研修会



## 常に知的で刺激的な附属学校を目指して —春期研修会—

附属高等学校 鈴木 亨

酒井邦嘉氏は、言語脳科学という分野でfMRI(機能的磁気共鳴画像)を用いて、言語・文法の獲得のメカニズムを実証的に明らかにしようとしています。

今回の講演では、外国語の獲得に関して英語科の教員から、手話をめぐっては聾学校の教員から、鋭い質問や議論が提起され、非常に刺激的なやり取りに触れることができました。

当初、「全附属教員統一の研修会」ということに、困惑したのは事実です。小学校から高校までの普通学校、特殊教育諸学校に、500人以上の教員を抱えており、共通のテーマは思いつきがないものでした。その点、酒井さんは、「理系・文系」という枠に押し込められがちな学問観を大いに揺さぶる講演者として最適でした。

附属学校は、各校で主催する研究大会や公開授業の他にも、さまざまな活動を行っています。その一方、自己完結してしまい、現場に籠もるおそれもあります。「研修」として特に構えることなく、こうした学校種を越えた企画に、可能性を感じました。

今回、広報が十分ではなかったかも知れませんが、学外からの参加に対してもオープンな形でした。

附属学校は教育研究フィールドとして、本学のみならず、わが国教育界の共有財産であるという、自覚と自負を持ち続けたいと思います。

## 特別支援教育研究センター春期セミナー

特別支援教育研究センター 前川久男

第2回特別支援教育の最前線は「乳幼児・就学前期の障害児支援の課題と展望」をテーマに、全国各地の盲・ろう・養護学校の教員を中心に185名の参加を得て3月26日に開催されました。当日は、本学附属の障害教育5校が実践している乳幼児・就学前期の障害をもつ子ども、家族への支援について話題提供されました。それぞれの学校がもつ資源を、地域の障害を持つ乳幼児への支援に積極的に提供できる障害教育学校のセンター的機能をいかに実現しているかを全国から参加した教員の方々に提供できたことは、今後の障害教育学校に期待されているセンター的機能を充実していく上で意義のあるセミナーであったと考えています。

盲・ろう・養護学校がそれぞれ持つ専門性を発揮し、地域のニーズに応えていくことがますます求められています。各学校が提供可能なものを明確にしつつ、今後さらに各地で実践可能なモデルを提示していくことが特別支援教育研究センターに求められていることを感じさせられました。また、宍戸和成文部科学省視学官、米山明心身障害児総合医療療育センター医長、緒方明子明治学院大学教授、飯野順子本学附属盲学校校長(附属学校教育局教授)によるパネルディスカッションでは、学校と他機関との連携、センター的機能を実現するための学校の取組みについて、学校が主体性を発揮して地域の教育ニーズに応じていくことの重要性が指摘されました。特殊教育から特別支援教育へ大きく改革していくこの時期、学校、教員、関連機関、本人、家族の協働した主体的取組みが重要なこと、それぞれの専門性の発揮が鍵となることが確認されたと考えています。

## 特別支援教育研究センター主催セミナー 「特別支援教育の最前線(2)」に参加して

宮崎県教育庁特別支援教育室 中島浩美

今回のテーマである「乳幼児・就学前期の他機関との連携」「乳幼児・就学前期に求められる障害教育学校のセンター的機能」といった視点での取組みは、教育現場において非常に必要と考えられながらもどう実践すればよいかかわからないのが実状であると思われます。そこで、私は教育現場の先生方と一緒に考えることのできる話題を求め受講しました。今回、盲・ろう・養護学校それぞれの学校の障害特性や地域性に基づいた実践事例の報告を聞くことができたことで、今できることから始めるといった取組みのスタンスが必要ながよくわかりました。

また、指定討論とパネルディスカッションにおいても、特別支援教育を推進する上で、どのように支援体制を作っていけばよいか分かり易く助言をいただくことができました。

本県からも、ろう学校、養護学校から3名の先生方が受講されており、教育現場が求めている話題を特別支援教育研究センターがこのように発信していただくことに深く感謝しております。

今後、このようなセミナーを地方で受講できる方法の1つとして、本県で整備されている盲・ろう・養護学校間をテレビ会議システム(多地点間送受信)でつなぐ方法は導入できないのか探っていければと考えています。



## ○新任教員紹介

附属盲学校長  
皆川春雄



この4月に附属盲学校長として着任致しました皆川春雄です。視覚障害教育26年、知的障害教育6年の教職生活に続いて、今後一層、視覚障害教育のナショナルセンターを目指そうとしている附属盲学校に勤めさせていただくことになりましたことを、深いご縁と考えております。日比谷公園のまん前、かつての鹿鳴館の隣にある会社に勤め、そこで土光敏夫社長にお会いしたことから、自分の教師への転進の歩みが始まりました。固い枠に、他か

らも自らも縛られて仕事をするを当然と考えていた人々の行動と発想を、土光社長は、自由な、柔軟の風で解放してしまうようでした。若かった当時、このような人がいる、という感動だけを持って会社を辞し、教師になりました。

その頃からのモットーです、「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快に」(井上ひさし)。今後、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

附属学校教育局教授  
生田茂



この5月に、首都大学東京(東京都立大学)から異動してまいりました。

この数年、多摩地域でインターネットを活用したコミュニティ(多摩・未来、多摩・まなび)を主宰し、子どもたちや学校の先生の協働の探求的な学び合いを支援する活動を行うとともに、都立大学附属高校の校長として、生徒や先生と一緒に「やさしさとゆたかな関わり」を目指して奮闘してきました。

現在、小中高の先生と、「インターネットの

検索能力の差異に及ぼす要因」に関する研究プロジェクトを行っています。情報を収集・加工・編纂し、批判的に読み取り、判断する力は、既存の「学力」とどのように関係しているのでしょうか？めまぐるしく動く情報環境の中で、小学校や高校、大学で大規模な実験を行い、経年変化も含めて統計的な処理を行っています。

教育局のみなさんや附属学校のみなさんに学びながら、協働の取組みができればと願っています。どうぞ、宜しくお願いします。

附属学校教育局講師  
菅野和恵



筑波キャンパスから茗荷谷の地へ赴任して参りました。都心の伝統あるキャンパスで、附属学校教育局の一員として教育に携わることができることを大変光栄に思います。私はこれまで、心身障害学を学び、主に、ダウン症候群の方や知的障害の方の心理・発達相談に取組み、またこのことを踏まえて研究に従事してまいりました。本年4月に「発達障害者支援法」が施行されたことを機に、今後さらに、軽度発達障害の方への支援のあり方に関する研究に

も着手すべきである、と認識いたしております。附属学校教育局では、本学の附属学校に在籍する児童・生徒の皆さんが健やかに育ち、活き活きと学べるような教育環境が構築できるよう、教育・研究に励み、積極的な貢献ができるよう努力してまいりたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

附属学校教育局準研究員  
下山晃司



4月より附属学校教育局に配属された、準研究員の下山晃司と申します。専門が発達心理学・教育心理学であることや、茨城県でスクールカウンセラーを務めていたことから、附属諸学校と密接に関係するこの仕事に対して、期待で胸がいっぱいです。筑波大学附属諸学校は、各分野におけるリーダー育成に長年の伝統があると認識しています。能力が高い(=仕事ができる)と必然的にリーダー的地位に就くことが多いですが、ここ数年の公私を問わない組織犯罪などを耳にすると、「真のリーダーに

必要な資質は？」と深く考えさせられてしまいます。個人的な見解ですが、真のリーダーには高い倫理観が備わっているべきと考えます。属する集団のためだけでなく、社会正義のために働くことができる、すなわち、時にはwhistle blower(警笛を鳴らす人)となれる人こそが、真のリーダーと言えるのではないのでしょうか。そのような人材を附属学校から多数輩出できることに役割を立てれば、と願っています。

どうぞ、宜しくお願いします。

附属学校教育局次長  
宮崎秀生



大阪教育大学から4月1日付で本学に着任しました。前任地では総務部長として、大学の法人化と附属池田小学校の事件の処理を手がけました。

法人化は大学の夢実現と生き残る礎を如何に図るかが大きな課題でした。特に教員養成大学は、効率化係数による運営費交付金の減額の中で、ゼロ免課程と附属学校の将来が、最も大きな課題でした。私は文科省で初等中等教育局の仕事が長かった事もあり、附属学校を審議する室員の一員として関与しました。

また、附属池田小学校の事件処理では、学校安全の大切さと事件処理の困難さを身をもつ

て体験しました。安全で安心できる学校の実現は、学校経営の基礎という認識を新たにしました。

筑波大学の附属学校は、我が国の学校教育の模範として常にリードしてきた伝統を持ち、今後も発展していく必要のある学校です。

このたび、輝かしい伝統を持った組織の一員として参加できることは、非常に名誉なことと思っております。谷川教育長のご指導と皆様のお力添えを得ながら、微力ながら精一杯持てる力を発揮したいと思っております。よろしくお願い致します。

## 平成17年度附属学校教育局指導教員の役割および業務内容一覧

委員会等	役割および業務概要
附属学校連携委員会	大学・附属学校連携委員会は、大学と附属学校が連携して教育・研究が推進されることを目指している。指導教員は本委員会の中心メンバーとして、連携の在り方について検討するとともに、連携の連絡調整を行う。
附属学校教育局プロジェクト研究	指導教員は、学校教育に関する社会からの要請に応じる研究プロジェクトを企画し附属学校の教員および大学の教員と共同で研究を行う。本年度は ①児童生徒の心身の健康とそのサポート・システムの在り方 ②個別の教育支援計画の開発 ③筑波大学および附属学校における教職教育の在り方 ④共に創る交流教育のプロジェクト研究が予定されている。
教職	筑波大学附属学校では、筑波大学学生の教育実習や介護等体験、「教職基礎実践」等の講義での実習体験等が行われ、教職教育の重要な要としての役割を担っている。附属学校教育局の教員は、附属学校における教育実習の調整や指導・支援等、全学学群教職課程委員会、教職課程専門委員会と関わりながら、筑波大学の教職教育の一部を担うとともに、「教職実践特講」や「教職基礎実践」の講義を担当し、学部レベルの実践的な教職教育に貢献している。
教育相談	指導教員は、附属学校教育局に配置されている「教育相談室」において附属学校の幼児・児童・生徒の問題に関する相談にあっている。さらに、教育研究科カウンセリング専攻と共同で「筑波大学心理・心身障害教育相談大塚グループ」における心理および心身障害に関する実践と運営にあっている。
研修	「附属学校教員研修検討委員会」（平成16年度）は、附属の教員に対する研修サービスを附属学校教育局を中心にして提供するために設けられた。附属学校教育局所属の指導教員が研修業務の一部を担当することが求められたことにより、時代や必要に応じた研修を適宜進めるために検討を重ねている。今後法定研修の実施等も含め、附属学校の教員への研修を企画実施する委員会として発展する予定である。
広報	学内のみならず全国の大学・大学附属学校に向けて、筑波大学附属学校と附属学校教育局の活動内容をよりよく知っていただくことを旨に、平成16年度より、タイムリーな情報満載の筑波大学附属学校教育局の広報誌「ポロニア」（本誌・年3回）を発行している。また、教育局のHP( <a href="http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/">http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/</a> )等を活用した広報業務を一層充実させ、学内外への活動内容の広報発信に努めている。
産学連携	平成16年12月に時事通信社と実施協定を締結し、全都道府県等の教員採用試験問題を分析している。各都道府県等により出題形式等が異なり、異なる質の教員を採用していることが明らかになりつつある。どのように試験問題が実施されているかについては興味深いところであり、今後、いかなる教員採用試験問題を実施し、有能な教員を採用するかということに資する示唆が得られよう。
学校あんしん推進委員会	附属学校の児童・生徒が安全で安心できる学校生活を送ることができるよう教育局と各附属学校に設置した相談窓口である。それぞれに相談員がおり、面談や電話にて相談を行っている。相談内容については、当事者および関係者の人権に十分配慮し、個人の秘密を厳守している。

### 私の学校の 名物先生 vol.2

#### 高村先生のこと 附属学校教育局長 梅原無石

「名物先生」と言われる人は何人もいるが、「附属学校の名物先生」と言って外部に紹介するとすれば、まずはこの人である。

高村明良先生は現在の高等部主事で、数学担当の全盲の先生である。書かれるのは仕方がないが、自分のことなど絶対に書かないと本人が言い張るので、やむなく悪文の私が書くはめになってしまった。

彼は本校高等部から点字試験の特別処置（点字受験者には一般の1.5倍の時間が与えられる）など無かった時代に、「途中でやめてもらうこともある得る」と言われながらも立教大学の数学科に進んだ。まさに視覚障害学生の大学進学を切り開いてきた中の一人である。当時のことなので、やはり就職にも苦労し、やっと塾の講師になるのだが、全盲の人間が講師と聞いて心配した親たちから、塾へ抗議の電話が相次いだ時があったそうだ。ちょうどこの時、コンピュータ関係のことで、彼がTV出演するに及んで、抗議

の電話はびたりと無くなり、彼の講義の受講者がぐんと増えたそうである。高村さんらしいエピソードである。

高村さんは視覚障害者向けの情報処理の第一人者で、日本で最初の点

ソフト「コータクン」を開発したり、大きな本棚を占領してしまうほどかさばる点字辞書データをCD化し、点字ディスプレイと組み合わせて引けるようにしたり、活躍はめざましいものがある。

「みんなが同じ目的を持ったとしても、それぞれがもっとも自分にふさわしい手段を選択することが大事で、プロセスの平等ではだめだ」と言うのが高村先生の持論だ。「人と同じことを、同じようにやりたいと言うが、それではだめ。もっとも自分にとって都合のよいやり方を見つける!」と口を酸っぱくして生徒に言っても、なかなか分かってもらえないとよく嘆いている。表面的なかたちだけ同じにするのではなく、同等の結果を求めて、自分たちにふさわしい独自の手段を見つけ出すというのは、まさに高村先生自らが実践してきたやり方であるし、障害者が社会進出していく上で大切な考え方である。

同じ障害を持っている生徒にとって、高村先生は身近にある目標でもあり、あこがれ（だいふ年をと、昔ほどではないが）でもあるのだが、生徒によるとよく授業で脱線する面白い先生で、親しみやすい変な（先生らしくない）先生なのだそうだ。「ばこばこ音して歩いてくるから、高さんだってすぐ分かるよ」と生徒は言うが、「相手がいることに気づかず、声をかけてやれないことがあるから、相手が気づけば」と高村先生は言い、今日もばこばこの靴を履き続けるのである。



## 筑波大学東京キャンパス大塚地区の紹介

今回は、私たち筑波大学附属学校教育局のある筑波大学東京キャンパス大塚地区を紹介します。従来は東京キャンパスと言えば大塚地区のことを指していましたが、この4月からJR秋葉原駅前に筑波大学法科大学院が開設されましたので、東京キャンパスには大塚地区と秋葉原地区の2箇所が存在しますのでご注意下さい。さて、東京メトロ・丸の内線・茗荷谷駅から徒歩3分の大塚地区（懐かしの「東京教育大学」跡地の一部）には公園の緑に囲まれ、都心とは思えないとても「癒し系」な環境です。大塚地区には私たち附属学校教育局の他に、社会人対象の夜間大学院として「ビジネス科学研究科」、「教育研究科（カウンセリング専攻）」、体育研究科（スポーツ健康システム・マネジメント専攻）などがあります。したがって昼夜や年齢を問わず、様々な人々の行き交いの多いのが大塚地区の特徴です。面白いところでは、Jリーグチームの監督になるために必要な「日本サッカー協会S級ライセンス」講習会会場にも、この大塚地区が使われたことがありました。「廊下を歩いていたら、往年の有名サッカー選手に出会った」ことを誇らしげに語る人も、附属学校教育局にはいます。



目前に迫ってきた話題としては、本年8月24日に「つくばエクスプレス（旧称：常磐新線）」の開業があります。茨城県つくば市の筑波大学本部へのアクセスが格段に良くなりますので、一日も早い開業が待たれます。近くへお越しの際には、教育の森公園、占春園の散策がてら、大塚地区へ是非お立ち寄りください。（下山晃司）

## 《編集後記》

穏やかな桜花の季節から、新緑萌えるころとなりました。季節の移ろいととも、我が筑波大学も国立大学法人化、二年目の歩みを始めました。

思えば、昨年度は、法人化の大組織改革の中でとまどうことも多い年でしたが、新組織に一人一人が息吹を吹き込むべく、一丸となって思いを形にする努力を続けてきた一年でもあったように思います。第三号を迎えた本号を「法人化二年目の躍動」と題したのも、附属学校教育局と11校の附属学校が車の両輪となって、常に歩みを止めることなく、生き活きと前進し続ける力みなぎる今の状態を表したからにほかなりません。

本号では、昨年度を締めくくった三大大行事としての附属学校と附属学校教育局主催の「筑波大学附属学校研究発表会」「春期研修会」、特別支援教育研究センター主催の「研修会」の概要の報告、また、名物先生第二弾では附属盲学校の先生にご登場頂きました。さらに、新年度の新たな息吹を感じる谷川教育長の言、新年度業務一覧、今年度新任教員・次長の紹介、拡大の一途をたどる筑波大学東京キャンパスの全貌を紹介させて頂きました。これからも、筑波大学の着実な歴史的歩みをお届けしていきたいと思えます。

一年目の種まきの成果がようやく双葉となり成長の明かしを示しつつある今、命の水を注ぎつつ、大いなる収穫の時を願って、日々汗する努力をこれからも皆で一緒にしていきたいと気持ちを新たにしています。

（飯田範子）

ホローニア  
paulownia

vol.3

発行日……平成17(2005)年5月31日  
発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英  
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
ホローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……篠原吉徳  
編集委員……千田捷照・生田 茂・飯田範子・  
下山晃司・大村登男  
デザイン……スピーチ・バルーン  
印刷……広研印刷